

# 因果の多様性について

会場健大(Takehiro Aiba)

北海道大学理学院博士課程後期

因果というものを一義的に定義、あるいは説明しようという試みが従来なされてきた。たとえば Lewis や Mackie のような論理的アプローチであったり、Salmon や Dowe のようなプロセス理論であったり、Suppes らによる確率論的アプローチなどが知られているが、それらはいずれも Cartwright(2004)によれば失敗している。というのも、Cartwright によれば因果はそもそも一枚岩の普遍的概念ではなく、複数の概念があいまって構成されている複合的概念だからである。そこで Cartwright が重要視するのが「分厚い(Thick)」記述である。因果関係を記述する上で「A が B の原因である」のような抽象的な記述ではなく、具体的な動詞を用いた詳細な記述こそが意味を持つのである。この因果の多様性に批判的で、反実仮想をベースにした介入によって因果認識の基礎を一義的におくことができるとした Woodward との議論を簡単に取り上げる。

その上で、この問題がたんに哲学上の形而上学的問題に留まるのではなく、応用上もきわめて重要なものであることを論じる。それが特に顕著なのは社会科学である。たとえば政治学においては、統計的手法を主に用いる定量的方法とケーススタディなどを中心とした定性的方法との隔たりが長らく続いてきたが、これは特に因果的推論の方法に端を発すると見ることができる。King, Keohane, Verba(1994)は反実仮想を因果的推論のベースにおき、この反実条件を実際の世界の中でバイアスなく作り出そうとするならば標本の数を多く取るよりないとする。したがって因果的推論を行うという社会科学者の共通の目的からは、事例の数を少なく取る定性的手法は支持されないことになる、というのが彼らの主張である。一方、定性的手法の擁護者である Collier, Brady, Seawright(2004)が想定する因果プロセス観察は必ずしも反実状況を想定せず、重視されるのは因果的メカニズムのまさに「分厚い(Thick)」分析である。彼らは因果プロセス観察によって定量的手法の間違った推論を正した例などを挙げ、定性的手法が定量的手法の補佐やサンプル数が不足している場合の不十分な代替手法に留まるのではなく、研究手法として同等のものとして確固たる地位を占めることを主張した。こうした議論において Cartwright と Woodward の議論の内容が反映される点が大いにあるように思われる。本発表では Cartwright の議論が優位に立っていることを示しながら、それを援用する形で定性的手法の擁護を試みる。